

プロローグ

多種多様な種族で溢れる世界。

その世界では2000年以上争い、その争いは種族戦争と呼ばれ、種族は争いあい、時には同盟を組み、時には新しい種族が生まれ、時には滅亡し、その数は年を経るごとに減少していった。

そうして今現在、残っている種族は全ての種族の原型と呼ばれる人族、強大な魔力と力を持った龍人族、繁殖力が強く、戦闘能力が高い獣人族、多種多様な魔法を操り、森の中では常勝しているエルフ族、水上では無敵の力を発揮する魚人族、火水地風を司り、争いを好まない精霊族の六種族だ。

より詳しく説明しよう。

人族は魔力も身体能力も他種族に比べれば低い種族だ。

そんな彼らは他種族に勝つことはできないと悟り、魔法に頼ることなく、代わりに戦う者を作り出そうという発想に至った。

研究は長い年月かかり、人族は何度か絶滅の危機にさらされたが、その度に人族全体で結束し、その危機を乗り越えてきた。

そして1000年前に生まれた天才によって、科学が発展し、世話用の機械や戦闘用の機械などを多く作り出し、襲いかかってくる種族は機械の手によって次々と絶滅していき、人族は次第に他種族から注目されるようになったが、人族が自分から種族戦争に参加することはなかった。

彼らは争いよりも科学の発展に力を入れたのだ。

そうして彼らは科学の力で機械の壁を作り、その中で今でも人族は科学を発展させているという。

龍人族は強力な魔力と力を兼ね備えた最強の種族だ。

世界を支配するのは龍人族だという大義の元、大いに暴れ、世界の半分を支配した。

しかし、その支配は龍人族至上主義であり、多種族は奴隷のように扱われ、支配を恐れた多くの種族が龍人族に対抗するために作った連合に500年前に敗れた。

その大戦は龍人族だけでなく連合も多大な被害を出し、龍人族を追い詰めて、死ぬ気で反抗されてはまずいと思った、連合は龍人族に和睦を申し入れ、滅びるくらいならと龍人族は勝者である連合の和睦を受け入れた。

その際、龍人族は世界に干渉しないことを契約し、人跡未踏の最高峰の山、スピアギアマウンテンに里を作ることが許され、そこに住み着いた。

今の総人数は100人ほどで、見聞のため旅に出ること以外は基本的に龍人族が下界に行くことはなかった。

獣人族は動物の耳と能力を持った種族だ。

この星が生まれて以降、様々な種類の獣人族が存在し、平和に暮らしていた。

しかし、種族戦争が勃発すると、同じ獣人族同士で争うものも現れ、その数は年々減っていき、ついには猫人族と犬人族だけになった。

このままでは獣人族が滅亡してしまうと悟った猫人族と犬人族の長は話し合い、その結果、同盟を交わし、今では猫人族と犬人族の両方を獣人族と呼ぶようになった。

全種族の中で一番人口が多く、魔力はあまりないが身体能力は高く、戦闘能力は高い。

獣人族の王は強い者になるという法の元、現在の王は犬人族が務めている。

エルフ族は魔力が高く、多彩な魔法を使う、森の守護者だ。

通常種であるエルフ、異種であるダークエルフ、高位種であるハイエルフがおり、異種は通常種より魔力は少ないが、高い腕力を持ち、高位種は通常種より強い魔力を保有している。

どの種も龍人族同様美男美女が多く、1500年以上前では奴隷として高い価格で売り買いされていたが、1400年前に一人のエルフが奴隷たちを解放し、多くのエルフに大森林に来るように魔法で呼びかけ、集まったエルフたちは呼びかけた者を王として、エルフたちは以降、大森林で過ごすことになった。

彼らは種族戦争には加担せず、集まった大森林、通称“迷いの大森林”と呼ばれる、深い森の奥で国を作り住み、森を守ることを使命としている。

“迷いの大森林”は高い木々のせいで方向感覚を誤り安く、罫も無数に仕掛けてあり、さらに同盟を組んでいる精霊族の力によりエルフ以外は迷うようになっており、多くの種族が

エルフを手に入れようと“迷いの大森林”へと進行したが、どの種族もエルフの国へはたどり着くことはなかった。

魚人族は脚の代わりに尾びれを持つ、水生種族だ。
美男美女が多く、水中では高速で泳ぐことができ、水を操る魔法が得意であり、海底都市ルルイエに主に生息している海の支配者。
魚人族は中立を宣言しており、敵対した種族には船を沈めさせて、漁を出来ないようにさせる。

精霊族はこの世界が作られた時から存在する種族だ。
生や死という概念はなく、すべての精霊が可愛い見目をしている。
魔法とは違う、火水地風を操る特別な力を持っており、火精霊、水精霊、地精霊、風精霊の四種類がいる。
この特別な力を目当てに昔は捕獲されていたが、突然変異で生まれた妖精女王が妖精たちを統率し、“迷いの大森林”へと姿を消した。
その後、同じく“迷いの大森林”へと逃げてきたエルフと契約を交わし、エルフ以外は森で迷うように力を行っている。

以上のように現在ではほとんどの種族は中立や自国に引きこもっており、種族統一の野望を持っているのは獣人族だけであり、獣人族はエルフ族を標的に定めていた。
そのために獣人族は10年ほどの年月をかけて、戦力増強を図り、今では大戦力を保有していた。

第1章 淫墮の序章

早朝。
人跡未踏の最高峰の山、スペアギアマウンテンの頂上から山腹にかけて龍人族の里が作られていた。
山腹には山を切り開き、岩で作られた家々、山頂には龍人族の女王が住む城が立てられている。
人口は百人ほどで、若者や子供しか見かけず、年寄りの姿はないが、それは当然のことだった。
龍人族の寿命は長く、成長スピードも他の種族とは一線を画す。
見た目は子供でも100~200歳、若者でも300~1000歳で、女王に至っては2000歳を超えている。
精神の成熟は300歳から始まり、子供の姿をした者は年は重ねていても、見た目通りの精神をしている。
龍人族は闘争を生きがいとしている種族であるが、連合に敗れたあと、それぞれ何かに打ち込めるものを探しており、その中で魔法の開発に力を注ぐ者がいた。
その者の名前はニーラ。
ニーラの家は魔法の開発という危険なものであるので、里外れに作られていた。
家の中は様々なものが散々とし、床の真ん中に魔法陣を描いている女性がいる。

「さて、間違いはないかな〜」

彼女がニーラである。
腰を曲げて、濃い赤色の大きな瞳を動かし、魔法陣に間違いがないかを確認している。
彼女は白を基調として布地の服を着用し、赤い透明感のあるスカートを履いている。
プルプルとした小さな唇が特徴的で、瞳と同様の色をした腰まで届く長髪をポニーテールにしてそれを三つ編みにし、人間と変わらない見目をしているが、頭には龍族の証である角があった。
人ごとに角には違いがあり、ニーラは深紅色の角だった。

「よしッ！」

勢いよく腰を正すと、拳二つ分はあろう乳房がブルンと揺れる。

「あとは、魔力を注いでっ、と」

ニーラは魔法陣に手をかざす。
すると手が赤く発光をはじめ、魔法陣に魔力が注入されているのが分かる。
魔法陣も光に呼応するかのように、赤く発光を始める。

「成功してよね～」

そう念じながら、ニーラは魔力を注ぎ、魔法陣は光を強くしていく。

「あっ！」

魔法陣の光がただの発光ではなく、キラキラとした粒子のようなものを周囲にまき散らす
発光に変化し、粒子は床に触れると雪のように瞬時に消える。

「これは成功だッ！」

ニーラはそう確信し、喜びを露にする。
しかし……。
バチッ、バチバチッ。

「ん？あれ～？これはもしかして……」

魔法陣からイヤな音が鳴り始め、電気を放つ。
バチバチバチバチッ！！

「失敗だぁぁッッ！！」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオンンン……。
ニーラがそう叫んだ瞬間に魔法陣が爆発した。
それも盛大に。
里中に爆音が響き渡る。

「師匠～ッ！」

爆発したすぐ後、ニーラの家には一人の少女が走ってくる。
彼女はクラリスと言い、ニーラの弟子だ。
純白のワンピースを翻しながら、バラバラになったニーラの家に近づいていく。

「師匠～ッ！大丈夫ですかッ！」
「大丈夫だよ～」

瓦礫の下敷きになっていたニーラが魔力で瓦礫を吹っ飛ばして、立ち上がり、パンパンと
服についてる埃を飛ばす。

「ふう」
「怪我はありませんか？」
「こんな瓦礫で怪我はしないよ。それにしても……失敗か～」

ニーラが残念そうにうなだれる。
大きなショックを受けているようだ。
クラリスはその様子を見て、慰めようとは全く思わなかった。
何故ならニーラは超ポジティブシンキングの持ち主であり、すぐにクラリスに対してニッコリと天真爛漫な笑顔を見せる。

「ま、いいか。次の実験をしよう！」

ニーラが瓦礫の山に向かって手を振る。
すると淡い赤色を纏った瓦礫が宙に浮き、勝手に動き始めた。
みるみる内に瓦礫は家の形になり、すっかり家は元通りになった。
今使ったのはニーラが作った、壊れた元の物があるなら、元の形に戻る再生魔法だ。
元の形に戻るには、その物が5年以上形を保っていないとではない制約はあるが、非常に使い勝手のいい魔法である。
二人は元に戻った家に入ると、別の実験を始める。

「これでいいですか、師匠」

クラリスが丁度、床にさっきとは別の魔法陣を書き終わった。

「うん。それでいいよ～。飲み込みが早いね～」
「ありがとうございます」

魔法陣を書くにはそれ相応の知識が必要で、さらにその知識を応用しなくてはならず、素人には絶対に書けない。
魔法を使う種族は最初からいくつもの魔法が使えるものがある。
龍人族もそうだ。
しかし、オリジナルの魔法を作り出すにはまず、魔法陣を書くことから始まる。
寿命の短い種族は長い間、継承しつつ研究を行い、作り出した新しい魔法を魔法陣から読み解き、呪文という形にして後世へと伝えていく。
ニーラは天才と言われていたが、魔法陣を書くことを習得するのに300年ほど必要だった。
それに対し、クラリスは150歳にして魔法陣を書くことができ、ニーラは心の中ではクラリスこそが真の天才だと思っていた。

「もうすぐ私も教えられる立場になっちゃうかもね～」
「そんなことはありませんよ。まだまだ師匠から学ぶことはいっぱいありますから」
「うふふっ。可愛いな～」

ニーラはクラリスを抱きかかえ、頬ずりする。
クラリスのすべすべでモチモチした頬が簡単に形を変える。

「止めてくださいよお、師匠～」

クラリスは表面上では嫌がりつつも、拒否する行動には移さない。
ニーラのことを好きだからだ。
クラリスの両親も魔法の研究家であり、常日頃から研究に明け暮れており、そんな両親と一緒に簡単な研究の手伝いをして、クラリスは幸せに過ごしていた。
しかし、悲劇が訪れる。
クラリスの両親は魔法の実験で死に、天涯孤独になってしまった。
そこで親代わりになったのが、研究家同士であり、よく家に来ていたニーラだ。
事件から100年たった今ではクラリスは本当の親のようにニーラを慕っている。

「あれ、もうこんなに日が暮れたんだ」

ニーラが窓から外を見ると日が暮れ、部屋に茜色の光が差し込んでいた。

「今日は泊まる？」

ニーラが親代わりになってから最初と一緒に暮らしていたが、50年ほど経つとクラリスは両親がいた家に住み始め、時々ニーラの家泊まることがあった。

「今日は両親の命日なので……」
「……そうだったね」

クラリスは両親の命日になると毎年欠かさず、鎮魂の祈りを捧げていた。

クラリスが自分の家に帰ると、ニーラは夕食を食べ、日課である魔導書を読む。

と、脳内で試行錯誤している間に夜は更け、眠る時間となり、ニーラは就寝する。

真夜中。
暗闇の家の中、小さな小さな、細長く、ピンク色の肌をしている触手が蠢いていた。
この虫は早朝の魔法実験で召喚された生物だ。
そう。
大爆発を起こし、一見失敗したと思っていた魔法は成功していた。
実験の内容は生物を召喚する魔法を開発することだった。
しかし、ただの召喚ではなく、この世界とは別の異世界の生物を召喚する実験だ。

触手は蠢きながら、少しずつニーラへと近づいていく。

着々と淫虫はニーラに近づいている。
ベッドの足を上り、シーツを進み、枕元へと近づく。

そして枕から耳へと近づく。

「……」

ぷちゅりと淫虫が液体を耳に流し込む。
これは寄生主に寄生する瞬間を悟らせないための体液で、感覚がマヒする効果がある。

「……」

そしてゆっくりとニーラの耳の中に、淫虫が侵入していく。
その違和感にニーラは全く気付いていなかった。

「……」

耳からどんどん奥へ、奥へと進んで行き、ついに到達する。
生物の人格を司る脳へと。

「……」

脳にたどり着いた淫虫は別の体液を寄生する部分に流す。
それは寄生する際の痛みを発生させない体液。
代わりに快感を与える、恐ろしい体液。

「んふう……はぁ……ああぁ……」

寄生が始まった。
ニーラは微かに息を漏らしながら喘いでいる。
太ももを閉め、股を擦り合わせる。

「んん……は、ああぁぁ♥……んふう……」

汗が滲む。
息に湿っぽさが含まれはじめ、頬が紅潮する。
少しづつ、少しづつ、慎重に淫虫は寄生を進める。

「んはぁぁ♥ああぁぁ……はぁぁぁぁ……」

息が荒くなる。
声が大きくなる。
快楽が身体を支配する。
パンツは染みができ始め、薄い寝間着から勃起した乳首が見える。
身体が快楽で震える。

「は、ああぁぁぁ♥あはぁぁ、んはぁ、はぁぁぁ♥んんんん」

熱い吐息が止まらない。
声が止まらない。
脳を弄られるたびに快感が生まれる。
寄生が進む。

「はっひいっ♥ああぁぁぁぁっ♥んはぁぁぁッ、ひはぁぁぁ、ああぁぁぁぁぁっ♥」

ガクガクと身体が震える。
絶頂。
絶頂。
絶頂。
身体がイク。
脳がイク。

止まらない。
パンツの染みは大きくなり、吸収しきれなかった、いやらしい液体がシーツに漏れる。
乳首は勝手にプルプルと震える。
クリトリスが皮から顔を出し、ビンビンに勃起する。

「ひiiiiiiiiッ、ああああああッ♥あッあッあッあッあッあッあッ、あああああ
ああああッ♥」

圧倒的なオーガズムがニーラを襲う。
口から涎が垂れる。
びっしょりと汗をかき、寝間着が濡れる。
膣口からはとめどなく愛液が溢れる。
脳に寄生される痛みが暴力的な快楽に変換される。
イク。
イク。
ニーラはイク。
物欲しそうに膣口をヒクヒクとさせながら。
身体をガクガクと痙攣させながら。
小さな唇を震わせながら。
大きな乳房をプルプルと震わせながら。

「んああああああッ♥ああああああああああッ、いひひひひひひひひひひッ
♥♥|

絶叫のような嬌声をニーラは上げる。
天真爛漫な笑顔を浮かべていた顔が、快楽でぐちゃぐちゃに崩れている。
涎と鼻水と涙が混ざり合って、シーツを汚す。
開かれていない瞼の下で、ニーラは白目を剥いている。

「うひひひひひひッ♥ひひあああああつ、あああああああつ♥はあああ、ひつ……ああ♥……」

声の音量が段階的に下がっていく。
 身体の震えが止まり、荒い息遣いが収まっていく。
 どうやら寄生が完了したようだった。
 しかし、寄生したからといった終わりではなく、これから人格の統合と肉体改造を淫虫は
 行う。
 この世界に召喚されてしまった悪魔の生物。
 ニーラは寄生され、彼女を発端に世界は異様な姿へと形を変えていく。
 それはそう遠くない未来……。



早朝。
ニーラが目が覚める。

「うわあああッ！何これッ！」

ベッドのシーツには大きな染みが出来ていた。
マクラにも染みがあり、寝間着もぐしょぐしょだった。

「どういうこと？」

股間に違和感を感じ、パンツに手を突っ込み、秘部に手を触れると、くちゅりと水音になる。

「なんで……濡れてるの？」

そうして、思考を動かそうとするニーラ。

「う～ん。どうしっひい♡」

その瞬間に短い喘ぎ声を上げる。
それは淫虫が脳を操作して、思考を止めさせた合図だった。

「はあ、あああ、そうだった。昨日は……ベッドで、オナニーしてたんだった」

と、ニーラは淫虫から与えられた記憶を疑いもなく信じる。

「クラリスが来る前に片付けないと」

ニーラは様々な体液で濡れているシーツやマクラカバー、寝間着、下着を魔法で生み出した水に浸し、洗って、魔法で乾かした。
それが終わって実験の準備をしていると、水色のワンピースを着ているクラリスがやって来た。

「おはよう、クラリス」
「おはようございます。師匠」

ニーラはクラリスの顔を見る。
まだまだ150歳の小さな身体。
すべすべでぶにぶにした肌。
薄く、小さい唇。
クリクリとした目。
健康的な鎖骨。
可愛い。
視線を縫い留められたように、ニーラはクラリスを見つめる。

「師匠？」
「……」
「師匠」
「……」
「師匠ッ！！」
「はえッ！？」

クラリスの大きな声にハッとする。

（どうして……私、クラリスをずっと見つめて……）
「大丈夫ですか？師匠」
「う、うん。大丈夫だよ～」

クラリスの顔、声、仕草を見て、聞くたびに身体が熱くなり、着替えた新しいパンツに染みができる。

（え？何で……濡れて……。身体に何か異変が）

別の身体のような反応をする自分の身体に驚くニーラは、身体の変化に疑問を持ったが、その思考は突如変わる。

突然降って湧いたその考えにニーラは納得する。
これも浮虫の仕業だった。

「さ、今日も実験頑張るよ～」
「はい」

そうして、ニーラは自分の身体の変化に気づくたびに触手が別の方向へと考えを変えさせ、ニーラは今日一日をいつも通りに過ごしたのであった。



真夜中。
ニーラに寄生した淫虫は肉体改造の準備を進める。
まずは血管に体液を注入する。
この体液の成分は増殖をはじめ、血管に寄生し、それから細胞の一つ一つに寄生をする。
寄生された細胞は、その細胞の特徴を損なわずに、劣化を全くしない新しい細胞へと変わる。
生まれ変わった細胞は栄養の元がなくても栄養を作り出し、その身体は飲食が不要になり、外見は常に若いままだ。
そして最も重要な器官、子宮は触手である淫虫を生み出す器官へと変貌する。
母乳の成分も変わり、肉体そのものが淫虫を生み、育てるものへと変わり果てる。

ニーラは浅く息を吐きながら、艶めかしい声を上げる。
肉体改造の弊害でニーラの身体には、甘い快樂の炎で炙られるようなチリチリとした感覚が全身を巡っていた。
汗をかいているが、昨日ほどではなく、しっとりと寝間着が濡れる。
身体をクネクネとよじらせながら、無意識に手が下腹部への方へと向かう。

ニーラの腰が時折クイクイと動く。
下腹部へと伸びた腕が動き、股間を圧迫する。

身体をよじった瞬間に、クリトリスが圧迫されて密着していた布地の下着と擦れ、ビリビリとした快感を生み出す。
ニーラの身体が軽く跳ね、膣をキュッと反射的に閉めるとぷちゅりと愛液を絞りだした。

ニーラの身体がうつ伏せになる。
マクラに顔を埋め、くぐもった喘ぎ声が聞こえる。

うつ伏せになっても身体のよがりは止まらない。
二ーラの限界以上にツンツンと硬く勃起した乳首が押しつぶされ、擦れ、甘い快感を何度も何度も発生させ、背筋から脳にかけて走っていく。

そのせいでより激しく身体をよじらせることになり、乳首はさらに強く刺激され、またそれにより、身体をよじらせていく。

快楽が永遠と発生し、膣がヒクヒクと動きだし、膣口がぬめぬめと濡れていく。

「ンムウウツ、ンムウウツ♥ムウツ、ムウウウウウツ♥♥」

甲高い快樂の叫びもマクラによって吸収される。
脚をバタバタさせ、一緒に下敷きになった、股間を抑えていた手に力が入り、パンツ越しに指が膣口に侵入する。

指は膣口を搔くように上下に動き、パンツに愛液を塗りたくっていく。

「ムムフゥウウウウウッ♥♥ムムムウウウウウウウウ♥♥ウウウウウウウウウウウ
ウツツ♥♥♥」

身体の痙攣はより激しくなっていく。
乳首とクリトリスの快楽が蓄積されていく。
涎が次々と溢れ、顔を押さえつけているマクラのカバーが唾液で濡れ、染みは顔よりも大きくなっていく。

膣口の中に入っている指はパンツを破るようにグイグイと蜜壺の中へと入れていく。

「ムムウウウウウウウウウウウウッッッ♥♥ウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
ッッッ♥♥♥」

二度、大きくニーラの身体が跳ねた。
マクラが吸収しきれなかった大きなオーガズムの叫びが聞こえる。
膣口は指を放さないようにギュウギュウと指を咥え、それがより刺激を誘発し、膣全体に
快樂が走る。

擦られ続けている乳首はジンジンと痛みを発生しているが、それすらも快楽へと変化し、乳首すらもブルブルと痙攣している。

連続アクメはニーラが目覚めるまで止まることはなかった。



そして早朝。
ニーラはうつ伏せのまま目が覚めた。

「ムム？」
(おかしいな～。昨日はッ——)

昨日のことを思い出そうとすると、淫虫の記憶操作が行われる。

「ンウムウツ♥」
(はひい……そう、だった……昨日はうつ伏せで寝て、オナニーしたんだった)

股間をぐりぐりとベッドに押し付けながら、与えられた記憶をニーラは思い出す。

「さて、片付けて朝ごはん作ろっと」

ゆっくりとした動作でニーラはベッドから降り、愛液でグチョグチョのパンツと大きな染みがあるシーツ、唾液で濡れたマクラカバーを昨日と同様に洗濯して乾かした。

「ふっふっふふ～ん ♪」

ご機嫌に料理を作っているニーラ。
表面上は何も変化がないが、身体の中身は別物になっていた。
膣口とアナルはどんな太い物でも穴を拡張させ、受け入れらるようになった。

乳首からは母乳がでるようになり、クリトリスはまるでペニスのように大きくなることが可能で、射精もできるようになっている。
子宮はもう淫虫しか産めない器官になってしまっていた。
そして脳では淫虫の一部が脳と同化し、人格の統合も始まっていた。
昨日、クラリスを見て、身体が熱くなったのは淫虫が脳と同化し始めた合図だった。
淫虫の特徴である、同族を増やそうとする性質が表に出たのだ。
まだまだ昨日の時点ではほんの5分の1程だったが、今日は3分の1まで同化されていた。
それにより、さらなる変化がニーラに起こっていた。

「うん。そうだよ、その調子～」

クラリスがやってきて、実験の手伝いをしている最中。
クラリスは壁に魔法陣を描いており、それをニーラがクラリスの背中越しに見ていた。
ニーラの口調はいつも通り穏やかなものだが、パンツにはシミを作り、涎が口の中で大量に分泌されていた。

（はぁ、何でこんなに、クラリスが可愛くみえるの～。いや、可愛いのは昔からだけど）

そんなことを考えながら、まるで熱でもあるかのように、ニーラは頬を紅潮させ、息も少し荒くついている。
その様子にクラリスはニーラの方に身体を向ける。

「顔が赤いですよ、師匠」

クラリスが現れてからずっとこの調子で、昨日の様子も思い出し、クラリスは内心ニーラのことを心配していた。

「大丈夫だよ～。ただちょっと暑いだけだから。ほら、集中しないと～」
「……分かりました」

クラリスが再び身体を反対の方に向け、魔法陣を描き続けた。
後ろ姿から見える白い首筋。
柔らかそうなボブヘアの白銀の髪。
ぷにぷにとした二の腕を持った細い腕。
筋肉のついていないスラっとした脚。
全てが愛おしく見え、そして首筋に吸い付きたいという欲求がニーラを支配する。

（ああああ♥クラリスの首筋、綺麗だなあ。すごく魅力的だ～。……吸いたいなあ）

無意識にぺろりと唇を舐める。
湿った唇がツヤツヤと光る。
浅く、息をつきながら、足が勝手に進む。
一歩、また一歩とクラリスに近づいていく。
そしてクラリスの身長に合わせて、屈み、首筋に吸い付こうとした瞬間に。

「うわああッ！び、びっくりしたあ。師匠、なんですか？」

クラリスが後ろを振り返った。
目の前にニーラの顔があり、クラリスは驚きの声を上げる。

「え？あ？え～っと。別に何もないよお。ただ魔法陣の下の方を見たかっただけだよ～」

確かにクラリスの身体が邪魔して、魔法陣の一部が見えなかったが、酷い言い訳だった。
しかし、クラリスは何の疑いもなく、その言い訳を信じた。

「それならそうと言ってくださいよ」

そう言って、クラリスは魔法陣の前から移動する。

「ありがとう～」

ニーラは言い訳通りに魔法陣を見た。
心臓をバクバクと打ち鳴らしながら。